

「エージェンシー」をキーワードに、 自ら考え、判断し、行動できる生徒を育む 群馬県教育委員会

群馬県教育委員会（以下、県教委）は、2023年度から、「自ら考え、判断し、行動できる生徒の育成」を最上位目標とした「ステューデントエージェンシーハイスクール」事業（以下、SAH）を実施し、エージェンシーや非認知能力といった、「見えない力」の育成を推進している。SAHの目的や概要については県教委に、具体的な実践については指定校の2校に話を聞いた。

生徒がエージェンシーを 発揮できる環境をつくる

県教委は、2024年度からの「第4期 群馬県教育振興基本計画」（以下、基本計画）において、エージェンシーを發揮して自ら学ぶ「自律した学習者」の育成を目指す5つの重点政策を策定し、非認知能力を始めとする「見えない力」の育成を図っている（図1）。

「エージェンシー」は、「The OECD Learning Compass 2030」の中心的な概念として示されたもので、県教委は、「自分と社会をよりよくしよつと願う意志、原動力」と定義している。平田郁美教育長は、次のように語る。

「人は皆生まれながらに、よりよく生きたい、誰かの役に立ちたいという

思い、自ら成長する力、すなわちエージェンシーを持っています。しかし、私たち大人は、よかれと思って敷いたレールの上を子どもに歩ませ、子どもは自分で考え、決めて、行動する経験を十分に積むことができませんでした。その結果、主体性や自信が育ちにくい傾向にあったことは否めません。子どもがエージェンシーを發揮することができ環境をつくり、自律した学習者を育むという教育ビジョンを示しました」

県教委は、学校を信じて 任せる伴走に徹する

基本計画の策定に先立ち、23年度から県内の公立小・中学校、高校におい

て、自律した学習者の育成に向けた事業を展開している。その中の高校を対象とした事業がSAHだ。

SAHの最上位目標は、「自ら考え、判断し、行動できる生徒の育成」とした。その実現のために、指定校3校が自校の課題を明確にして取り組みの方向性を見だし、生徒がエージェンシーを發揮する活動を実践している（図2）。

「指定校が『生徒を信じて任せる』ことができるように、県教委が決めた活動に取り組んでもらう形ではなく、『学校・教師を信じて任せる』ことにしました」（平田教育長）

つまり、県教委は指定校の伴走に徹している。SAH担当の指導主事は、指定校が週1回程度実施する「コア会議」に参加し、教師と一緒に議論。県教委



教育長
平田郁美
ひらた・ゆみ
2021年度から現職。



高校教育課課長
高橋章
たかはし・あきら
2024年度から現職。

内で確認すべき事項や手続きなどが生じたら、県教委に持ち帰って確認・調整し、指定校が活動を円滑に進められるようにした。高校教育課の高橋章課長は、伴走型の支援についてこう語る。「例えば、活動計画を検討する場面では、よい提案があっても、その活動時間をどう捻出するのか、それで生徒

なぜ育む? 「見えない力」

図1 第4期 群馬県教育振興基本計画 (2024~28年度) 抜粋

◎最上位目標

自分とみんなのウェルビーイングが重なり合い、高め合う共生社会へ向けて ~ひとりひとりがエージェンシーを発揮し、自ら学びをつくり、行動し続ける「自律した学習者」の育成~

◎5つの重点政策

- 変化の激しい社会に対応できる資質・能力の育成
- 多様性を尊重し、協働する力の育成
- 自分と社会をより豊かにするための生涯にわたる学びの支援
- 心と体の健康に対する理解と向上
- 時代の変化に対応した教育イノベーションの推進

※群馬県教育委員会資料を基に編集部で作成。

図2 ステューデントエージェンシーハイスクールの概要

◎最上位目標

自ら考え、判断し、行動できる生徒の育成

◎取り組み内容

最上位目標の達成に向けて、研究・実践を行い、新たな学びのスタイル (群馬モデル) の構築を目指す。教師の働き方改革の視点を持って、以下の取り組みを行う。

- ①授業改善に関すること、
- ②特別活動に関すること、
- ③探究的な取り組みに関すること、
- ④その他の学校における取り組みに関すること

◎指定校 (指定期間)

SAHの趣旨にのっとり、具体的な取り組みを推進する学校
群馬県立前橋南高校、群馬県立高崎女子高校 (2023~25年度)
群馬県立伊勢崎高校 (2024~25年度)

◎協力校

SAHの趣旨に賛同し、指定校の取り組みを参考にすることで、取り組みを推進する学校
群馬県立前橋高校、群馬県立前橋女子高校、群馬県立高崎高校、群馬県立渋川高校、群馬県立渋川女子高校、群馬県立富岡高校、群馬県立太田フレックス高校、群馬県立沼田女子高校

※群馬県教育委員会資料を基に編集部で作成。

Pick up

非認知能力の評価・育成に関する共同研究を実施

群馬県教育委員会とベネッセ教育総合研究所は、2024年7月から、非認知能力の評価・育成に関する共同研究を進めています。群馬県の「非認知能力の評価・育成事業」の指定校・協力校の実践などを研究することで、育成すべき資質・能力の精緻化や、必要な資質・能力が身についたことを確認するための児童・生徒の姿、及び行動変容の見取り方の確立を目指しています。

先行して2023年から、中学校4校を含む指定校の実践は始まっています。それらを研究させていただくことで、何がうまく機能するのかを、さらに深掘りして整理するお手伝いをさせていただきます。



ベネッセ
コーポレーション
関東支社長
田邊心技
たなべ・しんぎ

の学力は維持できるのかといった様々な懸念が出て、議論が停滞することもありました。その際には、懸念をくみ取りつつ、提案を実現可能な計画に落とし込めるよう、論点を整理し、見落としている点はないかを先生方と確認することを心がけました。また、取り組みが具体化してくると、実施のための事務手続きが生じます。指導主事が毎週のコア会議に参加したことで、県教委は事務や調整を引き受けやすく、指定校は県教委に報告をする手間が省け、指定校の負担軽減にもなりました。

SAHの活動がしたい!
多くの中学生が志望理由に

SAHの指定1年目から、指定校では生徒が意欲的に活動している (P.10 15参照)。その様子は県教委公式のSNSで発信し、新聞やテレビの取材も積極的に受けている。SAHの取り組みを全県に広めるためには、生徒の活動を見聞してもらうことが重要だと考えるからだ。

中学生とその保護者には、早くもSAHの活動が認知されている。指定校

の1つである群馬県立前橋南高校では、24年度の高校入試の面接で、多くの受験生が「SAHの活動がしたい」と述べたという。また、24年度の中学生対象の学校説明会は、参加申し込み受け付け開始から5日目には定員の1000人に達した。

「SAHの活動の成否を握る鍵の1つは、教師のマインドです。自律的に活動し、時に教師の想定を超えて成長していく生徒を受け止め、生徒につかず離れず、伴走し続けることが重要です。そつしたマインドも、指定校の取り組み

みの発信を通じて全県に浸透させていきたいと考えています」(高橋課長)

群馬県は、OECD「社会情動的スキルに関する調査」(*)に日本で初めて参加した。24年4月にOECDから1回目の調査報告があり、同県は、共感する力、楽観主義、粘り強さ、責任感に社会経済的な差がないことなどが明らかになった。今後も順次公表される調査報告を、県教委内の「非認知教育専門家委員会」や外部機関の協力を得て分析し、生徒がエージェンシーを発揮することができる環境づくりに生かす考えだ。

* 児童・生徒の社会情動的スキルの形成及び発達を促進する、または妨げる要因を評価する国際的調査。今回が2回目の実施で、16カ国・都市が参加。

実践例

群馬県立高崎女子高校

全教師で自校のあり方を議論し、活動の目的を共有。 生徒の「自立」を組織的に支援する

1年をかけて

全教師の目線を合わせる

群馬県立高崎女子高校は、校内でスクール・ポリシー（以下、SP）とSAHについての議論を、23年度の1年間をかけて次のように行った。

まず、23年6月に全教師参加の校内研修を実施し、SAHの趣旨を教師間で共有した上で、自校の現状と課題、生徒に身につけてほしい資質・能力について話し合った。次に、管理職と各分掌・学年の主任、有志の教師が参加する「コア会議」において、前述の研修で出された意見を整理し、グラデュエーション・ポリシー（以下、GP）の原案を作成。教師から原案への意見を募った。そして、寄せられた意見を踏まえた改訂案を9月の職員会議で提案し、承認され、GPが確定した（図3）。9月に行った校内研修では、SAHの具体的な取り組みについて話し合った。土曜講座の見直しや複数担任制、

行事運営への生徒の参画など、様々な

取り組みのアイデアが出され、分掌内やコア会議で内容を検討。10月の校内研修で再び議論した後、12月末のコア会議で取り組みの原案をまとめ、24年2月末の職員会議に提案し、承認された。そして、SAHの具体的な取り組みを踏まえてカリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを策定した。

そうして策定されたSAHの実施計画は、24年3月に教師や生徒、保護者、学校外に周知された。さらに各取り組みの概要などをまとめた「SAH計画書」を作成し、全教師に配布。4月には、複数の分掌が関係する取り組みを調整したり、コア会議の議論をまとめて周知し、校内から意見を募ったりする役割を担う「SAH統括室」を設けた。丸橋寛校長は、組織づくりや運営方法、教師間の目線合わせを大切にしたいと語る。

「コア会議は週1回実施し、23年度の実施回数は実に40回に上りました。

図3 グラデュエーション・ポリシー（GP）

自立

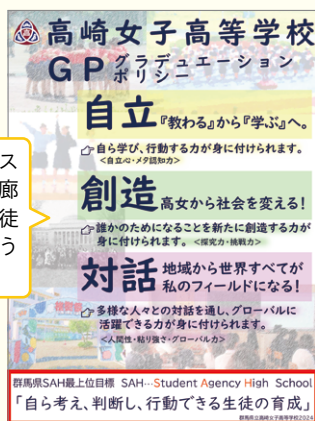
「教わる」から「学ぶ」へ。
自ら学び、行動する力が身につけられます。
〈自立心、メタ認知力〉

創造

高女から社会を変える！
誰かのためになることを新たに創造する力が身につけられます。
〈探究力、挑戦力〉

対話

地域から世界すべてが私のフィールドになる！
多様な人々との対話を通し、グローバルに活躍する力が身につけられます。
〈人間性、粘り強さ、グローバル力〉



GPを掲げたポスターを教室や廊下に貼り、生徒が意識できるようにしている

※学校資料を基に編集部で作成。

少人数での定期的なコア会議と、全教師による校内研修において様々な視点で話し合う中で、取り組みの目的が共有され、SAHへの理解も深まりました。さらにSAH計画書で取り組みの概要について目線合わせをし、SAH統括室が分掌間の連携や調整を図ることで、様々な取り組みは真に組織的なものとなり、かつ迅速に実施できるよ

うになったと考えています」

「自立・創造・対話」というGPの背景にある思いについて、SAH統括室長の中村理恵先生は次のように語る。

「本校の生徒は、教師からの課題や指示をしつかりこなす一方で、見通しを持って主体的な学びを展開することが多少弱く、『自立』が不十分でした。また、多忙により、社会とのつながりが乏しいからか、自ら社会を変えていくビジョンを描く点に弱さがありました。一方で、将来はグローバルに活躍

生徒の実態を踏まえ、

「自立・創造・対話」をGPに

「自立・創造・対話」というGPの背景

にある思いについて、SAH統括室

長の中村理恵先生は次のように語る。

「本校の生徒は、教師からの課題や

指示をしつかりこなす一方で、見通し

を持って主体的な学びを展開すること

が多少弱く、『自立』が不十分でした。

また、多忙により、社会とのつながり

が乏しいからか、自ら社会を変えてい

くビジョンを描く点に弱さがありました。

一方で、将来はグローバルに活躍



吉田恵美
進路指導主事
よした・えみ
同校に赴任して9年目。理科(生物)。



中村理恵
SAH統括室長
なかむら・りえ
同校に赴任して5年目。地理歴史・公民科(地理)。



青木瑞代
教師
あおき・みずほ
同校に赴任して1年目。



丸橋 覚
校長
まるばし・さつお
同校に赴任して2年目。

したいという生徒が多いのも、本校の特徴の1つです。そこで、『自立』し、社会とつながりを持って多様な人と『対話』し、社会を変えられるような『創造』ができる『見えない力』の育成を目標としました」

GPとして掲げた「自立・創造・対話」を具体化するため、それぞれにキャッチコピーをつけることも、校内研修で出された生徒に身につけてほしい資質・能力の中で数が多かった7つの資

質・能力を振り分けた。

キャッチコピーには様々な案が出された。例えば「自立」のキャッチコピーの原案は「勉強はもう卒業」だったが、「知識・技能などの『見える力』の習得を軽んじるような文言にすべきではない」などの意見が上がった。進路指導主事の吉田恵美先生はこう振り返る。

「学びの自立を目指す点は全教師で共通理解ができていましたが、それが示す具体的な状態は教師によって異なる



井上貴智
教務主任
いのうえ・たかひろ
同校に赴任して2年目。地理歴史・公民科(地理)。



田村 晶
1学年主任
たむら・あきら
同校に赴任して2年目。英語科。

学校概要
設立 1899(明治32)年
形態 全日制/普通科/女子校
生徒数 1学年約280人
2023年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、群馬大、お茶の水女子大、東京外国語大、大阪大などに175人が合格。私立大は、自治医科大、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ652人が合格。

りました。出された意見も踏まえてコア会議で議論した結果、「教わるから学ぶ」に決まりました」

生徒が自分で計画を立てて学ぶ時間を時間割に組み込む

SAHとしての同校の取り組みは、「3つのキーと9つの具体的な取り組み」から成る(P.12図4)。「大学進学に最適化した学習プログラム」を1つめのキーにしたのは、進学校としての使命を果たす意志を示すためだ。

生徒の学びの自立を支援する観点で策定した取り組みの1つが、生徒が自分で計画を立てて学ぶ時間を時間割に組み込んだ「Aタイム」だ。24年度は、5・6月に3時間ずつ実施し、年間では15時間実施する予定としている。教務主任の井上貴智先生はこう説明する。

「4月末に、全校生徒にAタイムの趣旨を説明し、自分に必要だと思う学びを出してほしいと伝えました。学びの例を出すと、それにとらわれてしまうと考え、あえて例を示しませんでした」

初めてのAタイムは、生徒も教師も、教師主導ではない授業に戸惑いがあった。しかし、3コマを1チームとし、「まとまりのある学びをデザインしよう」と教師が呼びかけると、生徒は次第に

その時間をいかに活用するかを考えて取り組むようになっていった。振り返りシートには、「計画を立てて有意義に使えた」などと書く生徒が多く見られるようになってきている。

「Aタイムは生徒の『学びの自立』が目的でしたが、自分に必要な学びを考える過程で自己や他者と『対話』し、自分に必要な学びを『創造』する、3つのGPにつながっていました」(中村先生)

24年度の夏季休業では、例年実施していた、教師が指導する夏季講座の代わりに、自分で計画を立てて学習に取り組む学習会を最初の1週間で実施。さらに、各教科で必須の課題を減らし、自習の例として、1学期の学習内容を基にした探究的な学びなどを示した。

「今までの指導をやめることへの戸惑いや、やめても進学実績を維持することができるといった不安は確かにあります。しかし、教師が与える課題で学びが完結するよりも、取り組む課題を自分で選び、学校内外で様々な体験をする方が、知識・技能が生きて働く資質・能力として身につくはずだ。教師は課題の準備がなくなった分、授業づくりや教材研究に力を入れます。その方が教育全体としてはプラスになると考えています」(吉田先生)

1 大学進学に最適化した学習プログラム

- ① Aタイムの実施
- ② 長期休業中の個別最適な学びの支援 長期休業中に例年行っていた全員必修の講座をやめ、生徒が自分で計画して学べるよう、支援する。併せて、休業明けの学力テストもやめる。
- ③ 学びの時間の確保 定期考査や土曜講座などを見直し、生徒が主体的に計画を立て、調整し、自ら学びに取り組む時間を確保する。
- ④ チーム担任制の実施

2 未来を創る・未来につながる探究学習

- ⑤ 「総合的な探究の時間」の充実 フィールドワークなど、社会との接点を積極的に設け、生徒の興味・関心と社会課題を結びつけた探究学習を支援。総合型選抜の受験につなげる。
- ③ 生徒が主体的に取り組む学校行事やグローバル活動
- ⑥ 開校記念式典の企画・運営 有志の生徒による実行委員会を結成し、すべての企画・運営を生徒が担う。
- ⑦ 高女SAH委員会からの提案・実践 有志の生徒約20人による委員会が、校則の見直しや自習室の利用など、学校生活にかかわる改善を提案。生徒の意見を聞きながら実現する。
- ⑧ 生徒主体の修学旅行の検討 修学旅行の企画・運営に生徒が主体的にかかわる。
- ⑨ SAHの周知・徹底、評価・改善 SAHに関するポスター等の作成、学校のウェブサイトでの取り組みの発信。SAHの目的や成果等を広く周知。活動の不断の見直しを図る。

Aタイム (Agencyタイム、全学年で実施)

生徒が自分で計画を立てて学ぶ時間。24年度は年間15時間を設定。Aタイム当日の朝に活動計画を、終了後に活動の振り返りを担任に提出する。生徒は回を重ねるごとに活動を工夫しており、「科目にとらわれず、自分なりにバランスを考えて復習に取り組めてよかった」「時間を有効に使うにはどうすればよいか考えることができた」といった声が上がっている。

チーム担任制 (24年度は1年次のみ実施)

1年次の7クラスを3つのグループに分け、1グループあたり教師3~5人で担当。グループ内の各クラスの担任は2週ごとに交代し、面談は生徒が希望する教師が行う。生徒のよさや課題を複数の教師で多面的に見取ることができ、生徒への声かけが増えている。生徒の状況や連絡事項など、教師間の情報の共有が重要となる一方で、学級事務の負担が軽減されるメリットがある。

探究学習の実践例

小学校の教師を目指していた生徒は、探究学習を通じて、子どもが安心して過ごせる居場所づくりの大切さを学び、自分たちができることとして、小学生対象の交流会「高女教室」を企画・運営した。



※学校資料と取材を基に編集部で作成。

文化祭の時間短縮の判断に、生徒が提案を提示

生徒の主体的な活動は、23年度後半から活発化した。24年6月に開催した開校125周年の式典の準備を、有志の生徒10人から成る実行委員会が23年12月に着手。生徒の提案で、アメリカで活躍する卒業生に講演を依頼したり、学校の90年史を読み込み、学校の歴史をたどるクイズを作ったりした。

7月の椎樹祭(文化祭)では、生徒のエージェンシーが發揮された場面があった。2日目が猛暑日になり、学校は午後の企画の中止を判断。すると、代表の生徒が校長室を訪れ、丸橋校長に「体育館に来てください」と言った。「私が体育館に行くと、生徒たちが『中止にしないでください』と訴えてきました。泣いている生徒もいました。私が『じゃあ、どうすればよいか?』と尋ねると、生徒たちは午後の企画が実現できる案を示してきました。問題の解決に向けて懸命に知恵を出し合う姿は、私たちが育成を目指す生徒の姿そのものでした」(丸橋校長)

生徒の「自立・創造・対話」を支える環境づくりとして、24年度の1年次から始めたのが、複数の教師が複数のクラスを受け持つ「チーム担任制」だ。

1学年主任の田村晶先生はこう語る。「複数の教師で生徒を多面的に見取り、支援することができるようになりました。生徒は『いろいろな視点が見られる』『話しやすい先生が見つかる』などとチーム担任制を評価しています。どのクラスも特定の教師の色がなくなるため、例えば文化祭のクラス企画では、生徒は教師に頼らずに自分たちが思う通りに取り組んでいます」

24年度1学期末にGPに関する生徒の自己評価を実施したところ、例えば2年生(回答率57%)は、回答者の約半数が「自立・創造・対話」はそれぞれ「高まってきている」と回答した。青木瑞代(あきみ ずほ)教頭は、振り返りの意義をこう語る。「生徒が主体性と自分勝手を履き違えないように、自分の言動が誰かのためになっているかどうかをメタ認知できることが重要です。授業や行事の振り返り、教師の声かけなどを通じて、生徒が自分を客観視することができるよう、支援していきます」

丸橋校長は、生徒がGPの改訂などに参画することも考えているという。「生徒は自立して行動することができる存在であり、学校をつくる一員として生徒と教師は対話をし、協働して本校の教育活動をよりよいものにしていきたいと思っています」

実践例

群馬県立前橋南高校

生徒の活躍などを伝えるジャーナルを毎週発刊。
エージェンシーとは何かを全校に浸透させる

全校に教師の思いを発信。
すぐに生徒が動き出す

県教委からSAHの指定を受けた群馬県立前橋南高校は、「できるところから進めていこう」というスタンスで、23年度、「見えない力」を育成するための改革に着手した。

5月、高校総合体育大会の県大会に向けた壮行会で、星野亨^{（星野）}教頭が全校生徒に対して、自校がSAHの指定校となったことを報告。自校が考えるエージェンシーや非認知能力の重要性について説明し、「自ら考え、判断し、行動していこう」と呼びかけた。6月のPTA総会では、当時の校長が保護者に、県の基本計画やSAHの趣旨を説明し、認知能力とともに非認知能力の育成にも力を入れていくことを伝えた。

さらに、生徒・教師・保護者への啓発と自校の活動の情報発信を目的として、「MAENAN SAH Journal」(以下、ジャーナル、写真1)を毎週刊行する

ことにした。エージェンシーや非認知能力に

関する情報、生徒がエージェンシーを発揮した活動などを掲載。校長や教頭がそれらの情報や活動についてのコメントを書き、生徒の主体的な行動を歓迎する旨のメッセージを発信し続けた。星野教頭は、現在も毎週ジャーナルを発刊し続けている意図を次のように語る。

「多くの人にとってエージェンシーや非認知能力はなじみのない言葉ですし、それらを全校を挙げて育むのは、本校では初めてです。SAHの目的を共有し、エージェンシーや非認知能力といった『見えない力』を誰もが日常的に意識できるようにしようと考えました」

「自ら考え、判断し、行動すること」をいち早く体現したのは、生徒会役員だった。6月、生徒は生徒会係担当の原澤正樹先生に、「硬式野球部の試合の応援



写真1 「MAENAN SAH Journal」は、校内のネットワークで共有するほか、学校のウェブサイトでも公開。2024年7月までに53号を発刊した。
※学校資料をそのまま掲載。

援に有志の生徒が行けるよう、応援団を結成したい」と相談。それは授業がある日の試合も生徒が球場に行つて応援することで試合を盛り上げ、全校生徒の一体感を高めたいという思いからだった。

原澤先生は、その提案を企画書にまとめるよう助言。生徒は企画書を持って校長・教頭と交渉した。校長・教頭は試合当日の移動や暑さ対策、欠席する授業への対応など、検討すべき点を指摘。生徒はそれらの点についての対応策を調べ、考えをまとめ、校長・教頭に伝えた。そうしたやり取りを何度も繰り返し、企画を実現させた。



校長
原 拓史
はら・ひろふみ
同校に赴任して1年目。



教頭
星野 亨
ほしの・とある
同校に赴任して2年目。



1学年主任
高田 慧
たかた・あきら
同校に赴任して5年目。生徒指導部生活係担当。国語科。



1学年担任
原澤正樹
はらぞん・まさひろ
同校に赴任して8年目。生徒指導部生徒会係担当。英語科。



群馬県総合教育センター
長期研修員
児島佐理枝
こじま・さりえ
同校に赴任して4年目。理科(生物)。

学校概要

設立 1975 (昭和50) 年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年約200人
2023年度卒業生進路実績 国公立大は、筑波大、宇都宮大、群馬大、埼玉大、千葉大、東京学芸大、新潟大、信州大、高崎経済大、東京都立大などに65人が合格。私立大は、青山学院大、中央大、東京理科大学、法政大、明治大、立教大などに延べ325人が合格。

なぜ育む? 「見えない力」

図7 アンケートで自己評価する非認知能力

- ①課題発見力 (問題の所在を明らかにし、必要な情報分析を行う力)
 - ②計画立案力 (問題解決のための効果的な計画を立てる力)
 - ③実践力・実行力 (計画に沿って実践・行動する力)
 - ④親和力 (円滑な人間関係を築く力)
 - ⑤協働力 (周囲の人たちと協力的に業務を進める力)
 - ⑥統率力 (目標に向かって組織を動かす力)
 - ⑦感情制御力 (自分の気持ちの揺れをコントロールする力)
 - ⑧自信創出力 (ポジティブな考え方やモチベーションを維持する力)
 - ⑨行動持続力 (よい行動を習慣化させる力)
 - ⑩レジリエンス (失敗や困難から立ち直る力)
 - ⑪創造力・想像力 (新しいものを考えたり、創り出したりする力)
 - ⑫柔軟性 (変化に適應する力)
 - ⑬交渉力 (相手と話し合い、合意点を探る力)
 - ⑭発信力・発表力 (自分の意見や考えを分かりやすく発表する力)
 - ⑮ストレスコントロール・楽観性・忍耐力・鈍感力 (気に病まず、物事を進める力)
 - ⑯自己肯定感 (ありのままの自分を肯定する感覚)
 - ⑰判断力 (危機的状況や複数の選択肢が存在する状況で、効果的な意思決定を下す力)
 - ⑱ユーモア力 (言葉等によって、相手やその場を和ませたり、その場の空気を温かくする力)
 - ⑲共感力 (他者の考えや意見、喜怒哀楽といった感情に寄り添うことができる力)
 - ⑳労力対効果・効率実践力 (コスパ・タイパなどを含め、効率よく物事を推し進める力)
- ①～⑮は、社会情動的スキルや社会人基礎力などを参考に、星野教頭が原案を作成し、コア会議と職員会議を経て決定した項目。⑯～⑳は、1回目のアンケートの生徒の自由記述を基に設定した非認知能力で、() 内の説明も生徒の記述を生かした。 ※学校資料を基に編集部で作成。

づくりを進めている。まず、1・2年生が対象の土曜補習を廃止し、学習以外でも自分の関心のある校内外活動に挑戦しよう、生徒に呼びかけている。

各教科も課題を見直した。例えば英語科は、毎週末の課題を廃止した。

「以前は課題が未提出の生徒を放課後に残して取り組ませていましたが、それによって成績が伸びた生徒はほとんどいませんでした。成績が伸びたのは、教師に自ら添削を依頼したり、自分で計画を立てて学習したりした生徒でした。そこで、問題集の範囲を指定

し、1か月後の提出日までに自分で計画を立てて取り組ませる形にしました」(原澤先生)

全教師による授業改善のプロジェクトも推進中だ。教師がそれぞれ、①授業で生徒の主体性を育成する工夫、②1人1台端末の効果的な活用、③特定の非認知能力を育成する工夫のいずれかを選んで授業改善を図っている。

群馬県総合教育センター長期研修員の児島佐理枝先生は、担当する生物で、③をテーマとした授業改善に取り組んでいる(図8)。前述の非認知能力の自

図8 「生物基礎」の振り返りシート(抜粋)

日付	本時の疑問点	解決した疑問に○をつけてください	意欲系 課題発見力 計画立案力 実践力など	忍耐系 感情制御力 レジリエンス 行動持続力など	協働系 協働力 発信力 親和力など
			①課題発見力、 ②計画立案力、 ③実践力など	⑦感情制御力、 ⑩レジリエンス、 ⑨行動持続力など	⑤協働力、⑭発信力、 ④親和力など

生徒は授業の終わりに、授業中に疑問に思った点を記入。その後の授業や自習などで疑問が解消したら○をつける。また、授業中に発揮した非認知能力を記入する。「見えない力」を育成する手立てとして有効かどうか試行中。 ※学校資料を基に編集部で作成。

己評価のアンケートで、「平均より低いと思うもの」に多く挙げられていた②「計画立案力」と③「実践力・実行力」を發揮する場面を盛り込んだ、DNA抽出の実験に取り組む5時間の単元計画を立てた。児島先生はこう語る。

「生徒が班で実験方法を考え、実践し、成功・失敗にとらわれずに得られた結果を考察し、次につなげる展開にしました。それまで行ってきた、教師が実験方法を説明する授業よりも時間がかかり、ほかの単元との調整が必要ですが、生徒が自走して学習する上で

は必要なプロセスだと考えています」

教師は何をすべきか。
生徒の姿から理解が深まる

今でこそSAHの取り組みは順調に進んでいるが、導入当初は教師間に戸惑いもあったと、高田先生は語る。

「見えない力」を育成する重要性は分かっているけども、生徒の主体性を尊重しながら校内の秩序を保つことができるといった不安が教師間にありました。しかし、生徒が『主体性』を履き違えずに、教師の支援を受けながらも自分たちの力で物事を進め、応援を結成したり、頭髮・服装に関する校則の改定を実現したりする姿を見るうちに、生徒が『自ら考え、判断し、行動する』とはどういうことか、教師は生徒をどう支援すべきかについて、本校の教師は次第に理解を深めていったと感じています」

原拓史校長は今後の展望をこう語る。

「『自ら考え、判断し、行動する』ことは、特別な場面だけでなく、授業や特別活動、部活動など、普段の学校生活の中でも見られることです。教師がそれを見逃さずに光をあて、生徒のウェルビーイングが一層高まる学校をつくっていきたいと考えています」